

アーティスティックスポーツ
に関する舞踊学的探究の可能性
——1970年代ジョン・カリーを媒介とする舞踊界
とフィギュアスケート界の協働創作の意味

國學院大學 助教
町田 樹

【緒言】

スポーツ界には、アーティスティックスポーツ（以下、「AS」略記）と称される競技が存在する。技の「技術水準」のみならず、演技の「美的・芸術的価値」の両者を競うフィギュアスケートや新体操、アーティスティックスイミングなどが、その代表例である。これらの競技では、人間が持つ身体能力の極限を追求した技が披露されるのと同時に、音楽を伴った舞踊的表現活動が展開される。つまりASとは、競技的性質を備えながらも、舞踊的性質が色濃く反映された身体運動文化であると言えるだろう。実際、ほとんどのASは、そのルーツを舞踊文化に見出すことができる。

ところが、この「競技性」と「舞踊性」の両義的性質を有するがゆえに、ASはスポーツ文化やダンス文化の境界領域に位置づけられる傾向にある。そのため、従来スポーツ科学や舞踊学などの諸関連学問領域においても、研究の俎上に載せられることがほとんどなかった。しかし実は、この競技性と舞踊性が混在するASは、境界領域ならではの美的問題系を数多く抱えており、舞踊学の研究対象として極めてユニークであると考えられる。

なお、発表者はすでにASを対象とした舞踊学研究に取り組んでおり、その成果の一端を単著『AS研究序説』（白水社、2020）の中で発表。この研究を通じて、ASを舞踊学の研究対象として展開することの重要性を再認識した。

【本研究の目的】

以上のような経緯を背景とした本発表の目的は、舞踊学領域においてASを研究することの可能性をさらに検討することである。とはいえ、この目的を果たすためには、何よりもまず、ASの演技が舞踊学の観点から語るに足る「作品」であることを実証する必要があるだろう。そこで本発表では、ASの代表格であるフィギュアスケート（以下、「FS」と略記）の作品を取り上げて、舞踊学的な作品分析をケーススタディとして試みていく。そしてこの作品分析を通じて、FSと舞踊の間に豊かな影響受容関係が見出せることを確認しながら、最終的に、舞踊学の領域においてASを研究対象として取り扱うことの学術的意義を、実証的に考察していきたい。

【本研究の方法】

本発表の題材となるフィギュアスケートは、19世紀半ばにJ・ヘインズ（Jackson Haines, 1840-1875）というバレエダンサーによって、氷の上を滑走する技術と、バレエをはじめとする舞踊様式が組み合わせられたことで誕生したとされる。その証拠にFSの技術には、バレエの帕から影響を受けたとみられるものが数多く存在する。こうした歴史的背景に鑑み、本発表では、「FSとバレエ間の影響受容関係」に焦点を当てて作品分析を展開していくこととする。

なお今回の作品分析で取り上げるFS作品は、英国のスケーターであるジョン・カリー（John Curry, 1949-1994）が、1978年に発表した《牧神の午後》。その作品名の通り、V・ニジンスキーの同名作品（初演：1912年）をFSの作品として翻案した演目となっている。この作品を、主に以下に示した二つの観点から分析することで、本作とバレエ文化との間に見られる影響受容関係を実証することに試みていく。

【分析観点1】

発表者が開発したFS用の記譜法である「フィギュア・ノーテーション」を駆使して、カリー作品を構成する全ての動作を分節化し、バレエの帕の影響がどの程度見られるかを分析する。

【分析観点2】

ニジンスキーの《牧神の午後》をめぐる先行研究に基づきながら、翻案作品としてのカリー作品の真価を分析する。

【本研究において分析対象となる作品】

■FS作品《牧神の午後》（初演：1978年）

【振付】ノーマン・マアン

【実演】ジョン・カリー

C・フォルクス

【衣裳】N・ベイリス

【音楽】C・ドビュッシー

【楽曲】牧神の午後への前奏曲



※時間の都合上、本発表では作品を上映しないが、上記QRコードから事前に鑑賞することが可能。

【本研究の結果】

カリーのFS作品である《牧神の午後》の作品分析を通じて、FSにはバレエとの影響受容関係や相互交渉史が多分に見出せることが明らかとなる。これはすなわち、舞踊文化がスポーツの領域にも派生していることを如実に物語るものと言えるだろう。さらには、FS以外にも舞踊をルーツとするASが数多く存在している。こうしたASを対象とする舞踊学的研究は、必ずやこの学問領域の発展に寄与するものと考えられる。